

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

— 昆布山谷地区 妙本寺上墓地A地点の石造物調査 —

平成29(2017)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

島根県と大田市は、平成9年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行っています。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。そして、登録後もその歴史的位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでいるものであり、これまでに銀山400年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、平成28年度に実施した、石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地における石造物調査の成果を報告するものです。

昆布山谷地区は、戦国時代から明治時代にかけて鉱山開発や集落形成がなされたと考えられ、石見銀山の開発初期から江戸時代にかけての盛衰、近代の再開発までの歴史を知る上で重要な地点です。

妙本寺上墓地は、昆布山谷地区ではもっとも広範囲で、かつ多数の石造物が分布する墓地です。今回の調査では、石見銀山の最盛期にあたる戦国時代末から江戸時代前期の墓石群や、廃絶した寺院の僧侶の墓石群が確認されました。これらの調査成果は石見銀山の歴史や信仰のあり方を物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書を今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成29年3月

島根県教育委員会

教育長 鴨木朗

例　　言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2. 調査した場所は以下のとおりである。

昆布山谷地区 炙本寺上墓地A地点（大田市大森町4-363-2）

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査専門委員会

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）

大橋泰夫（島根大学法文学部教授）

勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）

黒田乃牛（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）

田辺征夫（公益財団法人大阪府文化財センター理事長）

中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校教授）

村上 隆（京都美術工芸大学教授）

事務局（平成28年度 島根県教育庁文化財課）

丹羽野 裕（文化財課長） 小塚誠治（世界遺産室長） 熱田貴保（世界遺産室主席研究員）

大庭俊次（同主席研究員） 植田晃広（同企画員） 出原淳史（同企画員）

桑垣正樹（同企画員） 矢野健太郎（同専門研究員） 小川齐子（同嘱託職員）

石造物指導者

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）

池上 悟（立正大学文学部教授）

調査参加者

現地調査

（調査指導者） 田中義昭、池上 悟

（立正大学院生・学部生） 足立佳代（大学院生）、高橋社人（学部生）

（島根県教育委員会） 熱田貴保、大庭俊次、矢野健太郎

（大田市教育委員会） 中田健一（石見銀山課課長補佐）、山手貴牛（同主任）

渡邊良介（同主事）、西尾克己（同嘱託職員）

新川 隆（同嘱託職員）、尾村 勝（同嘱託職員）

4. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町1597-3）において保管している。

5. 本書の執筆・編集は大庭が行った。

本文目次

第1章 調査の目的・対象・経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	4
第1節 石見銀山の位置と地質学的背景	4
第2節 石見銀山の歴史的背景	4
第3章 調査の概要	6
第1節 調査の経過	6
第2節 調査の方法	6
第3節 昆布山谷地区及びその寺院・墓地の概要	6
第4章 妙本寺上墓地A地点の調査	12
第1節 墓地の立地と石造物の分布	12
第2節 石造物の様相	12
第3節 まとめ	15

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡全体図	3
第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図	5
第3図 昆布山谷地区周辺図	7
第4図 妙本寺上墓地A地点石造物分布図	13
第5図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（1）	18
第6図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（2）	19
第7図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（3）	20
第8図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（4）	21
第9図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（5）	22
第10図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（6）	23
第11図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（7）	24
第12図 妙本寺上墓地A地点 石造物実測図（8）	25

表 目 次

第1表 A地点平坦面規模一覧表	12
第2表 A地点石塔等一覧表	12
第3表 A地点石塔部材一覧表	12
第4表 A地点地区別石塔類一覧表	15
第5表 A地点年代別石塔類一覧表	15
第6表 A地点地区別年代一覧表	15
第7表 A地点石造物一覧表	27

写真図版目次

図版1 妙本寺上墓地A地点全景（北から）	
妙本寺上墓地A地点上段法面及び上段平坦面（北東から）	
図版2 妙本寺上墓地A地点上段法面下基壇列（南西から）	
妙本寺上墓地A地点上段平坦面石殿1（南西から）	
図版3 妙本寺上墓地A地点中段平坦面（北から）	
妙本寺上墓地A地点中段平坦面西基壇（北から）	
図版4 妙本寺上墓地A地点中段平坦面東基壇（東から）	
妙本寺上墓地A地点下段平坦面（北東から）	
図版5 妙本寺上墓地A地点石造物（1）	
図版6 妙本寺上墓地A地点石造物（2）	
図版7 妙本寺上墓地A地点石造物（3）	
図版8 妙本寺上墓地A地点石造物（4）	
図版9 妙本寺上墓地A地点石造物（5）	

第1章 調査の目的・対象・経緯

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山にいたるまでに、繁榮期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史的過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第2節 調査の対象

一概に石造物といつても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは片うまでもないことがあるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の4つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第3節 調査の経緯

石造物（墓石）調査は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石鏡地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を抑えるため、紀年銘を持つ墓石の調査が重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなった。

- ①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るために分布調査。
 - ②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。
 - ③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料についての関連調査。
- これら3つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選

び、継続的に調査する計画を立てた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵光寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、平成9・10年度に分布調査を行っていた石見銀山地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は右見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓II・III・IVの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本経寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、柄畠谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区的高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区の墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓I、墓II東、墓III東、墓IV、墓Vの悉皆調査を行った。

また、柄畠谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

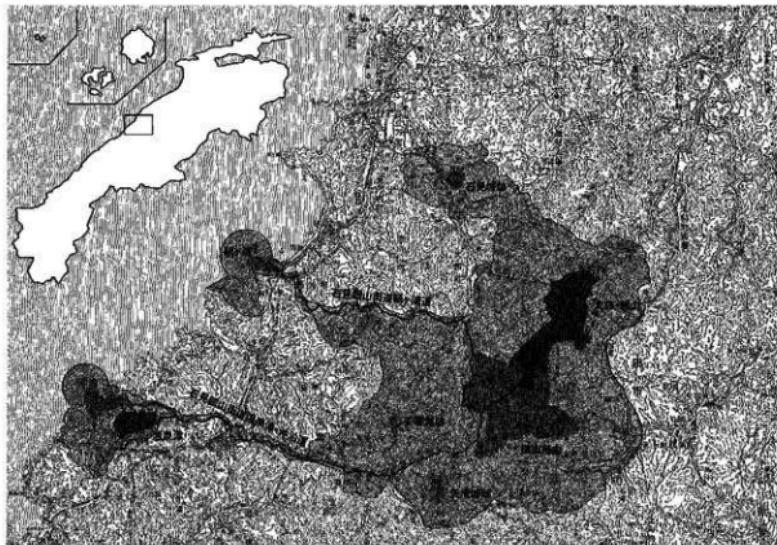
平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている尾布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地G地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

平成28年度は、前年度に引き続いて尾布山谷地区的妙本寺上墓地を調査対象とし、群中で最も古いと見られていた妙本寺上墓地A地点について悉皆調査を実施した。

【参考文献】

- 1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査図」『石見銀山』第3分冊
- 3 島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査図」『右見銀山』第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会1999『1999 温泉津』
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1—妙正寺—』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『右見銀山遺跡石造物調査報告書2—龍昌寺跡—』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3—安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外—』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4—長榮寺跡・石見銀山附地役人墓地(河島家・宗國家)一』
- 9 島根県教育委員会2004『石見銀山街道一晒ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書一』
- 10 島根県教育委員会2005『石見銀山街道一晒ヶ浦・沖津堀落調査報告一』

- 11 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書 5—分布調査と墓石調査の成果』
- 12 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書 6—温泉津地区恵院寺墓所一』
- 13 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書 7—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）一』
- 14 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書 8—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（2）一』
- 15 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書 9—西念寺墓地（3）・安原編中墓・人光寺墓地一』
- 16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書（補訂版）』
- 17 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物一』
- 18 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石鏡地区一』
- 19 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓Ⅲの調査一』
- 20 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13—木経寺墓地の調査一』
- 21 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—船畠谷地区宇甚光院の石造物調査一』
- 22 烏根県教育委員会2014『石見銀山一大谷地区 木経寺墓地発掘調査報告書一【山吹城南西麓の郭構造の調査】』
- 23 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15—石銀地区墓 I・墓 II 東・墓 III 東・墓 IV・墓 V の石造物調査一 船畠谷地区宇甚光院の石造物調査一』
- 24 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書16—昆布山谷地区妙本寺上墓地 E 地点・G 地点 虎岸寺跡の石造物調査一』



第1図 石見銀山遺跡全体図

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 石見銀山遺跡の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県上を持ち、古代律令制以来の旧国单位では、「出雲」「石見」「隱岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前記更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要寄山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という二つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鋼を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まない。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ピスマスなどが含まれる。

第2節 石見銀山遺跡の歴史的背景

石東地域では、近年、開発事業に伴って縄文・弥生時代の遺跡の調査例が増えている。大田市仁摩町の潮川流域にある古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで縄文時代後期以降の遺物・遺構が検出された。弥生時代～古墳時代の集落跡は、大田市鳥井南遺跡や仁摩町大園の庵寺遺跡で確認されている。庵寺遺跡と同所の庵寺古墳群は石見地方有数の規模の古墳群である。

平安時代前半期の遺跡では、縄釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面鏡が出土した大田市八

石遺跡が注目される。これらの遺跡では中世前期の貿易陶磁も出土し、河口に近い川岸に立地する状況から海上交通との関連をうかがわせる。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南東方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡のほか、奈良・平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡で、総往構造の主屋をもつ居宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、在地有力武士層の関与が考えられる。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見國守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見國守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504～1521）に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回した。

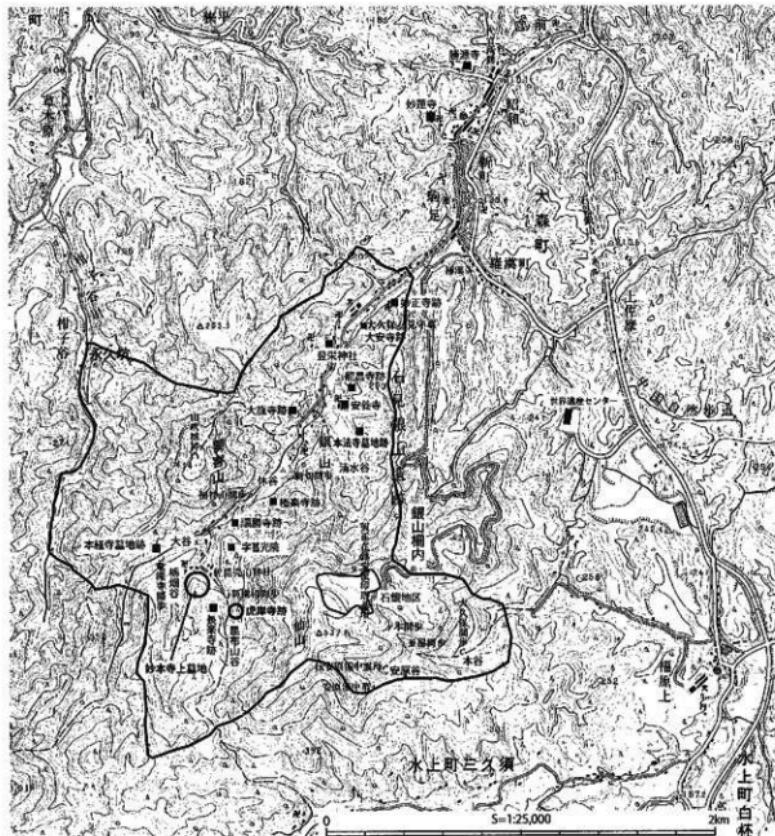
石見銀山は、『銀山旧記』では、大永6（1526）年に博多の有力商人神屋寿植によって発見されたと記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになった。天文2（1533）年には灰吹法が伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銅量は急激に増大した。

戦国期には、大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に造られている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある通摩郡は、周辺の安濃郡などとともに石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期には、初代奉行、大久保長安の開発により銀山は繁栄期を迎えた。この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5 t）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が少なくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元年（1673）以降の記録によると、産銀量は年間約

300貫（約1 t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187 t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく小規模な経営が続けられたが、明治19（1887）年に藤田組が経営をはじめ、近代的な鉱山開発が行われるようになった。近代の主要產品は銅で、明治後期から大正初期には軍需景気に乗り隆盛をみた。しかし、第一次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図

第3章 調査の概要

第1節 調査の経過

昆布山谷地区は、戦国時代から明治時代にかけて鉱山や集落が営まれ、石見銀山遺跡の歴史を考える上で重要な場所である。平成22年度から大田市教育委員会によって発掘調査が行われていることから、平成27年度から石造物調査も同地区を対象とし、墓地や石造物からその歴史的過程の解明を目指すこととした。

5月から7月にかけて、昨年度調査した妙本寺上墓地E地点及びG地点を除くA、B、C、D、F、Hの各地点について銘文調査を行い、石造物の凡そその種別や年代について把握した。

7月19日には、元鳥取県文化財保護審議会委員の田中義昭氏と、立正大学文学部教授の池上悟氏を招いて、石造物調査指導会を開催し、今後の妙本寺上墓地の調査計画について検討した。当年度は、妙本寺上墓地の中で最も古い時期の石造物が三段にわたって100基程度密集するA地点の悉皆調査を実施することとした。

8月17日から19日にかけて、島根県職員と外業作業員によって妙本寺上墓地A地点の下草除去や石造物の清掃を実施した。8月27日・28日には、県・市の職員のほか池上悟氏と立正大学院生1名、同大学学部生1名も加わり、A地点の悉皆調査を行った。8月28日のうちに、図面と拓本について記録の整理と、指導者を交えての若干のまとめをし、補足調査の必要なものについて引継ぎを行った。その後、10月12日に県・市の職員によって会合を持ち、当年度の調査の総括を行った。

第2節 調査の方法

妙木寺上墓地A地点の悉皆調査では、事前に下草等を除去したうえで、石造物の分布状況を確認し、墓塔・墓標など石造物の番号を付け、大田市教育委員会作成の「石見銀山遺跡地形図」を基におおよその地点を記録した。また、石造物調査カードを作成するとともに、写真撮影を行った。

調査カードには、実物の1/5で石造物を実測し、種類・銘文など必要事項を記入している。銘文を持つものの一部については、拓本を採っている。

第3節 昆布山谷地区及びその寺院・墓地の概要

(1) 昆布山谷地区の概要

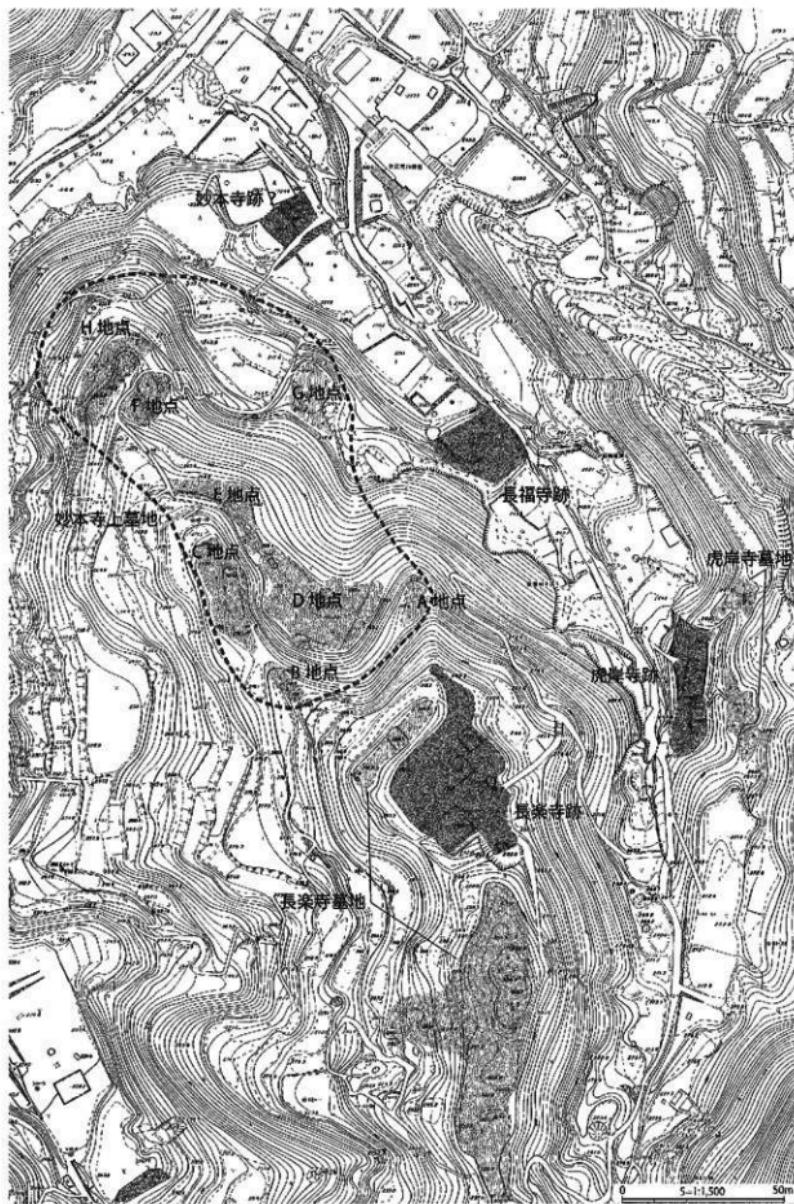
昆布山谷は、銀山六谷の一つで、仙ノ山山頂から北西の方角に位置している。南北方向に延びる長さ約600mの谷で、佐尾光山神社の西麓で柄畠谷に合流する。

この谷は、古くは天文年間から新しくは明治期まで、さまざまな史料に登場する。例えば、「銀山川記」^⑩、「高野山淨心院過去帳」^⑪には天文年間の記録が見られる。「安田家文書」や「高橋家文書」などには江戸時代における昆布山谷に関する詳細な記録が残されている。幕末～明治期の絵図や切図などには、谷筋の平坦面の細かな情報や道、溝まで詳しく描かれている。また、明治時代の「要害録」（上野寛司氏所蔵）^⑫には藤田組によって建設された鉱山施設も記されている。

また、大田市教育委員会による発掘調査^⑬や分布調査^⑭では、近世前半から明治期までの遺構・遺物が確認されている。

このように、昆布山谷地区は16世紀から明治時代にかけて鉱業活動や集落形成がなされたと考えられるところで、石見銀山の開発初期から隆盛・衰退、近代の再開発までの歴史を知るうえで重要な地区といえる。

谷筋の東西には佐尾光山神社や長楽寺などの寺院や墓地が存在し、多数の石造物が分布している。発掘調査や文献史料の調査のほか、石造物調査も詳細に進めていくことにより、この地区的変遷について総合的な検討が可能になるものと考える。



第3図 昆布山谷地区周辺図

(2) 昆布山谷地区の寺院

明治4(1871)年の上知令で、銀山町の各寺社が政府に寺社領を差し出す際に提出した文書と絵図があり、昆布山谷の谷筋の西側に長楽寺、長福寺、妙本寺、東側に虎岸寺が記されている。これらの概要は以下のとおりである。

長楽寺

真言宗の寺院で、明治12年の「寺院明細帳」(大田市所蔵)によれば、もとは仙ノ山に造立され、その後、年代不詳だが昆布山谷に移転し、明治10(1877)年9月に神宮寺に合併された、と記されている。

境内地は昆布山谷の西側の尾根上にある標高292mの平坦面にあり、寺院建物の基壇が残存している。境内地の北西から南西には土壠状の高まりが設けられている。

長福寺

「寺院明細帳」には曹洞宗とあるが、寺の山緒は不詳である。「木曾家文書」の絵図のほか、寛政年間の「石見国銀山庵繪図」(高橋家文書)でも昆布山谷の西側に描かれている。また、寛政元(1789)年の「両御巡見様之諸事覚書」(上野家文書)^⑩や「木曾家文書」には禪宗寺院として記載されている。

境内地は、「長福寺」の字名から、大田時大森町ホ366-1に所在したと考えられる。谷筋を通る道沿いにあり、東西13~20m、南北21mの台形状の平坦面(標高238m)が広がっている。

妙本寺

日蓮宗の寺院で、「寺院明細帳」によれば、元亀(1570~1573)年間に口上人により創立されたが、天明2(1782)年の火災で記録類が焼失したため不詳という。

「木曾家文書」の絵図には、寺は谷筋の道沿いにあり、手前側には橋が描かれている。第3図に「妙本寺?」と示した位置は、そのすぐ北側に橋の基礎とみられる部分があることから、絵図の寺の位置と対応すると考えられる。

虎岸寺

史料によっては「虎岩寺」と表記するものもあるが、ここでは「虎岸寺」を用いる。寺の由緒は不詳だが、寛政元(1789)年の「両御巡見様之諸事覚書」(上野家文書)や「木曾家文書」では禪宗寺院として記載されている。明治4(1871)年の「銀山町未年宗門帳」(高橋家文書)では、銀山町にある虎岸寺の檀家は1戸となっている^⑪。明治10(1877)年頃にはすでに境内地は官有地となっており、官有地払い下げにあたって同20年12月13日付で藤田組が村役場に提出した文書には、「一、右ノ内ニ百七拾四番ハ原ト虎岸寺ト云ヘル小坊アリシカ、元來此寺所得檀家等ノ無キ為維持ニ耐ヘ難ク、明治五年ノ頃遂ニ破壊シ其後用タル所ナシ」と記されている(上野家文書「要書録」(13-4))。

「要書録」の記述や、「虎岸寺」という字名から大田市大森町=274とその周辺に境内地があったと考えられる。標高257mにある平坦面で、谷筋が通る西側を石垣で区画している。2基の寺院建物の基壇と、その間に挟まれた1基の石塔基壇が残っている。

(3) 昆布山谷地区の墓地

昆布山谷地区では、これまでの調査によって長楽寺墓地と妙本寺上墓地、虎岸寺墓地が確認されており、各墓地の石造物の種類と概数が把握されている^⑫。また、長樂寺墓地については平成14年度に悉皆調査が行われている^⑬。各墓地の概数とこれまでの調査状況は以下のとおりである。

長樂寺墓地

境内地の北西側にある土壠状の高まりと、境内地の南側に延びる尾根上及びその西側の丘陵斜面上に墓地が形成されている。

平成14年度の悉皆調査では、長樂寺跡も含めて212基の石造物が確認されている。境内地北西側の墓地は、歴代住職の墓などから長樂寺に直接関連する墓地と考えられる。一方、南側の尾根上や西側斜面の墓地は、真言宗、浄土真宗、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗といった複数宗派の墓石が存在

し、共同墓地として營まれたものと推測される。

妙本寺上墓地

長楽寺跡から北西方向に延びる尾根上から東側の丘陵斜面にかけて広範囲にまたがっており、昆布山谷地区では最も広く、また石造物の点数が多い墓地である。

東側の斜面の字名「妙本寺ノ上エ」から「妙本寺上墓地」と呼称されているが、尾根上部の字名は「元西向寺昆布山平」、尾根先端側の字名は「崩烟谷元京山」である。また、「妙本寺上墓地」と日蓮宗「妙本寺」との関連性も明らかでない。こうしたことから、必ずしも適切な呼び方とは言えないが、名称変更による混乱を防ぐため、これまでどおり妙本寺上墓地と呼ぶこととする。

墓石は全体に満遍なく分布するのではなく、尾根上や斜面中腹の平坦面に多く存在している。ある程度のまとまりが見られるところをA～H地点に分けたが、これはあくまでも便宜的な区分で、A～H地点のほかにも墓石が点在しているところもある。墓域の設定・区分については、今後の調査によって見直しが必要となるかもしれない。

妙本寺上墓地は、平成10年度に踏査で約330基の石造物が確認され¹⁰、慶長年間（1596～1614）以前の墓塔が多数存在することで注目された。平成13年度の分布調査では、一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、角塔、無縫塔など総概数で500基近い石造物が確認されている。

平成27年度にはE地点の悉皆調査とG地点の銘文調査を行い、調査成果は以下のようであった。

・妙本寺上墓地E地点の悉皆調査

E地点は、昆布山谷に面しており、昆布山谷の西側丘陵斜面、標高268～270m部分に2段の平坦面を形成して墓地としている。昆布山谷に対してはかなり高くて、優位な開けた眺望と言える。

悉皆調査の結果、E地点では、一石宝篋印塔42基、一石五輪塔12基、組合せ宝篋印塔35基分以上（相輪35点、笠82点、塔身18点、基礎22点、台座7点）、無縫塔2基、光背形墓標2基、位牌型墓標3基、円頂方形墓標5基、円頂方柱墓標1基、

地蔵2基を確認した。

また、この地点は、妙本寺上墓地の中でも古い墓塔が多く密集する場所で、昆布山谷地区における墓域の形成を考える上で、重要な地点であることがわかつた。E地点で最も古い右塔は慶長4（1599）年銘の一石宝篋印塔である。その後1600年代から1610年代にかけて造墓数のピークを迎えるものの、1620年代から減少傾向となり、正保3（1646）年から元禄10（1697）年まで50年あまり紀年銘が確認されていない。これまでの銀山地区における石造物悉皆調査でも17世紀後半の墓石は少ないとから、造墓状況は低調であったと考えられる。これらの傾向は17世紀の初め頃の銀山の繁栄とその後の衰退、それに伴う人口変動などと対応したものと考えられる。その後、銀山全体では18世紀前半に宝篋印塔や五輪塔に代わって墓標や地蔵が採用され、19世紀初頭にかけて造墓数が順調に増加する傾向にあるが、E地点においては18世紀に造墓数は伸びず、明和8（1771）年のものが最後となる。これは、E地点の平坦面が造墓の飽和状態に達したことが主な理由と考えられる。

E地点では170cmを超える大型の宝篋印塔が9基存在したと考えられる。銀山の最盛期にあたる17世紀前半に鉱山開発と関わりを持った有力者・富裕層の墓であった可能性が考えられる。また、銘文調査から、浄土宗に係る墓石が非常に多く、浄土宗寺院の墓地の可能性も考えられる¹¹。

・妙本寺上墓地G地点の銘文調査

妙本寺上墓地G地点は、昆布山谷西側の丘陵中腹標高245～247m位置する。E地点と比べるとかなり低い位置にあり、到達しやすい。G地点での調査は石造物の種別や墓碑銘を中心とした調査であったが、石造物の概要や墓地の変遷を把握できた。また、佐昆亮山神社社家の本城家の墓所や多數の無縫塔など神社・寺院との関連性を見出すこともできる。G地点では一石宝篋印塔4基、二石宝篋印塔1基、一石五輪塔11基、組合せ宝篋印塔4基分以上（相輪3点、笠2点、塔身1点）、組

合せ五輪塔1基（火・水・地輪各1点）、無縫塔11基（塔身11点、基礎・台座10点）、位牌型墓標7基、円頂方形墓標31基、円頂方柱墓標35基、笠付方柱墓標1基、尖頂方柱墓標1基、平頂方柱墓標3基、分類不明墓標4基、地蔵14基、観音3基、石獣部材が確認された。

最古の紀年銘は慶長元号を持つ二石宝篋印塔で17世紀代に19基の五輪塔、宝篋印塔が建てられたと見られる。18世紀になると1710～1750年代にかけては増加傾向にあるが、その後は、銀山地区全体の傾向とは異なって、1860年代にかけて増減を繰り返している。明治期以降に造立されたのは、本城家の墓石のみで、昆布山谷の集落が衰退したことを見ている。銘文調査から、G地点では禪宗長福寺に付属する墓地が営まれた一方、区域を限って浄土真宗の信徒の墓が造られたと考えられる。また、18紀末から神社社家では神式認証号が用いられるようになったことで、墓地の中での多様性がより顕著になった¹⁰⁾。

虎岸寺墓地

虎岸寺跡の背後の丘陵上で、寺跡の北東側と東側に造成された平坦面に位置する。

平成13年度の分布調査で、概数ではあるが、組合せ宝篋印塔1基、角塔33基、石仏10基が確認されている。

平成27年度には銘文調査を行い、調査成果は以下のようであった。

・虎岸寺墓地の銘文調査

虎岸寺跡墓地は、昆布山谷の東側斜面にあり、標高257mの虎岸寺跡からさらに登って標高263mの東側背後の斜面に墓地が形成されている。南北20m東西10mの平坦面に70点あまりの墓石が確認された。一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔1基、位牌型墓標1基、円頂方形墓標27基、円頂方柱墓標28基、尖頂方柱墓標1基、地蔵12基（像12点、基礎6点）以上、観音2基を確認した。最も古い石塔は、享保5（1720）年統の一石五輪塔で、これ以降は、五輪塔、宝篋印塔はなくなり、墓標が主体に造立される。造墓数は、18世紀前半から19

世紀初頭にかけて増加傾向で、19世紀中頃に向けて減少し、19世紀後半以降は極めて低調である。

今回の調査では、地役人の丸茂久右衛門ほか8人によって建てられた福光石製の組合せ宝篋印塔が確認された。この宝篋印塔は、石見銀山で近世前期に一般的に見られるものとは大きく形態が異なるもので、笠が大きく開き、塔身には蓮華文や月輪が陽刻され、その内側に金剛界五仏種子の梵字が刻まれているなど、別系譜のものと考えられる。これと類似するものは、折畠谷地区字甚光院の愛宕社や、温泉津地区の金剛院墓地で確認されている。また、大森町の羅漢寺には、同様の形態で、花崗岩製の宝篋印塔がある。この塔は、江戸湯島にある靈雲寺の光海によって、田安宗武とその夫人の供養塔として、明和8（1771）年に建てられたものであることから、中央の石塔型式と考えられる。虎岸寺跡の宝篋印塔はこれより古いもので、いち早く中央の型式を取り入れて、製作されたものと評価できる。

この石塔は、特定個人の墓ではなく総供養塔として造立されたものと推測され、地役人と地域社会、寺院との関わりを考える上で注目される資料である¹⁰⁾。

【註】

- (1) 島根県教育委員会2003「石見銀山史料解説 銀山旧記」
- (2) 田中主一1999「わが国銀山開発に於ける石見人の役割～『高野山淨心院過去帳』を中心に～」『石見銀山遺跡総合調査報告書』第4冊島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか
- (3) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2016「石見銀山近代史料集 第一集 葉書録（一）」
- (4) 大田市教育委員会2012「石見銀山発掘調査概要20」
大田市教育委員会2013「石見銀山発掘調査概要21」
大田市教育委員会2014「石見銀山発掘調査概要22」
大田市教育委員会2015「石見銀山発掘調査概要23」
- (5) 尾村謙2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区的土地利用の変遷－文献史料と分布調査成果からみる－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究4』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- (6) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001「石見銀山遺跡石造物調査報告書1 紗正寺跡」
- (7) 仲野義文2009「銀山社会の解明 近世石見銀山の経営

と社会』

- (8) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』
- (9) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4 長楽寺跡・石見銀山附地役人(河島家・宗國家)』
- (10) 島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか1999『石造物調査報告書』『石見銀山遺跡総合調査報告書』第3冊
- (11)～(13) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山遺跡石造物調査報告書16—尾布山谷地区 妙本寺上墓地E地点・G地点 虎岸寺跡の石造物調査一』

第4章 妙本寺上墓地A地点の調査

第1節 墓地の立地と石造物の分布

妙本寺上墓地A地点は、大田市大森町363-2、字名「妙本寺ノ上エ」に所在する。昆布山谷の西側の中腹に位置している。A地点に到達するには、E地点からD地点を通過して下段平坦面の下から上の道筋と、E地点からC地点の尾根上に上がり、長樂寺墓地の下に回りこんで、上段平坦面に下りてくる道筋の二とおりの道筋がある。

上下3段の平坦面（以下、上段平坦面、中段平坦面、下段平坦面とする）とそれぞれの平坦面の上方法面（以下上段法面、中段法面、下段法面とする）に石造物が分布している。

上段平坦面は、標高278m、長さ13m、最大幅6mで、北西方向に張り出している。中段平坦面は、標高275.5m、長さ6.5m、最大幅4mを測る。北北西方向に張り出している。下段平坦面は、標高273m、長さ3m、最大幅2mを測る。北方向に張り出している。

第1表 A地点平坦面規模一覧表

各平坦面	標高(m)	長さ(m)	最大幅(m)	方向
上段平坦面	278	13	6	北西
中段平坦面	275.5	6.5	4	北北西
下段平坦面	273	3	2	北

第2節 石造物の様相

石塔・部材の数量

妙本寺上墓地A地点において確認された石造物の数量は、以下のとおりであった。

一石宝篋印塔18基、一石五輪塔14基、組合せ宝篋印塔11基（笠の点数による）、組合せ五輪塔1基（空風輪1点のみ）、無縫塔9基（基礎の点数による）、光背形墓標2基など、少なくとも、55基分の墓塔を確認した。また、石塔を囲い込んでいたと考えられる石殿2基も確認した。さらに、線香立4点、銘板1点が確認された。後述する部

材のみの石造物とあわせて実測点数は98点であった。

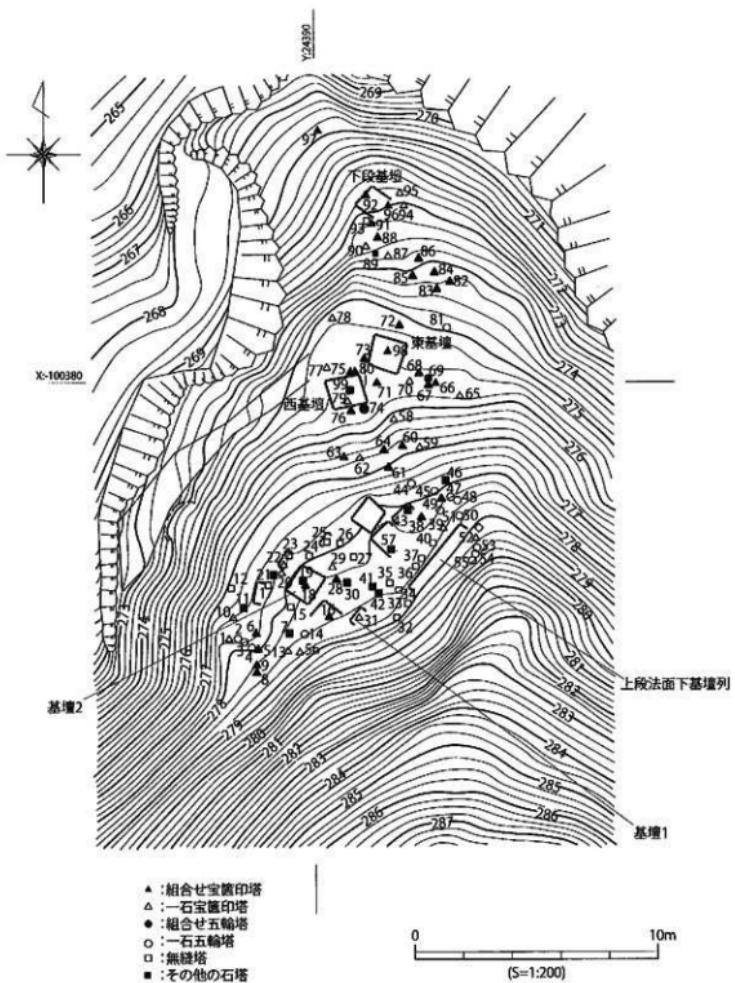
第2表 A地点石塔等一覧表

種別	数量	単位	備考
一石宝篋印塔	18	基	
一石五輪塔	14	基	
組合せ宝篋印塔	11	基	等の点数による
組合せ五輪塔	1	基	空風輪1点のみ
無縫塔	9	基	基礎の点数による
光背形墓標	2	基	
合計	55	基	
石殿	2	基	石殿1、石殿2
銘板	1	点	
線香立	4	基	

このほかに、部材のみ確認したもので、一石宝篋印塔の相輪2点、同笠1点、同塔身1点、基礎1点、一石五輪塔の空風輪1点、組合せ宝篋印塔の相輪9点、同基礎5点、同台座2点、組合せ五輪塔の空風輪1点、無縫塔の塔身7点、基礎9点があった。

第3表 A地点石塔部材一覧表

種別	部位	数量	単位
一石宝篋印塔	相輪	2	点
	笠	1	点
	塔身	1	点
	基礎	1	点
一石五輪塔	空風輪	1	点
	相輪	9	点
	笠	11	点
	基礎	5	点
組合せ五輪塔	台座	2	点
	空風輪	1	点
	無縫塔	7	点
	基礎	9	点
合計		50	点



第4図 妙本寺上墓地A地点石造物分布図

石塔の分布状況

これらの石塔や部材は、自立するものは少なく、多くの石塔が倒れていたり、組合せが分離したりしている。墓地自体が飽和状態にあるようで、後述するように、紀年銘で見ると17世紀延宝3（1675）年銘が最後である。それ以後に持ち込まれた石塔や部材は、ほとんど無いものと見られ、上中下各段ごとに、その分布状況にまとまりが見られる。

上段法面

上段法面には、上段法面下基壇列に残る32、33の2基の無縫塔と、52～55の4基の一石五輪塔が確認された。

上段平坦面

上段平坦面においては、石塔類、部材含めて実測点数で56点あり、各段、法面を通して最も数量が多い。一石宝篋印塔9基、一石五輪塔9基、組合せ宝篋印塔部材9点、無縫塔部材11点、光背形草標2基、線香立3点があり、このほかに、石殿2基（石殿1、石殿2とする）と基壇2基（基壇1～2とする）が確認された。

無縫塔及びその部材は上段平坦面と上段法面にしか分布していない。中段法面以下では、下段の基礎1点を除いて、確認されておらず特徴的である。また、基壇が2基確認されているが、割石や切石を寄せ集めて作られたもので、残存状態がよくない。基壇2については、組合せ宝篋印塔基礎と線香立が残っている程度だった。石殿は、2基とも確認した位置で潰れていた。

中段法面

中段法面では、一石宝篋印塔3基、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔部材4基が確認された。

一石五輪塔41は天正十三（1585）年銘が刻まれており、△地点の紀年銘のある石造物の中で最古のものである。法面に造立されたとは考えにくく、その痕跡もないことから上段平坦面のどこかにあったものと思われる。

中段平坦面

中段平坦面では、一石宝篋印塔6基、一石五輪

塔空風輪1点、組合せ宝篋印塔の部材7点、組合せ五輪塔空風輪1点が確認された。また、このほかに、銘板1点、線香立1点が確認された。

中段平坦面では、基壇が2基（東基壇・西基壇とする）確認された。どちらの基壇も若干の凹みはあるものの、元位置を保っており、残存状態は良好である。基壇の板石は、欠けたり割れたりしているものの、ほとんど抜き取られずに残っている。東基壇に建っていたのは、組合せ宝篋印塔基礎の71と同笠の72、相輪の73の各部材を含む組合せ宝篋印塔と思われる。西基壇に建っていたのは、組合せ宝篋印塔相輪の75を含む組合せ宝篋印塔と思われる。

下段法面

下段法面では、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔部材5点が確認された。

下段平坦面

下段平坦面では、一石宝篋印塔4基、組合せ宝篋印塔部材6点、無縫塔基礎1点、線香立1点が確認された。このほかに、基壇が1基（下段基壇とする）確認されている。宝篋印塔の台座と基壇の板石の一部と割石が一部残っているが残存状態は不良である。

次に、石造物の種別ごとに見ていく。

一石宝篋印塔（第5～6図）

23基確認したうち、21基を図示した。相輪を欠くものが多く、光形に近いものは9基であった。

宝珠の形態は、下部に請花を入れるものと、請花を持たず、中央に溝を入れているものがある。39は、宝珠、九輪、笠それぞれの下部の請花が重弁になっている。

9基で紀年銘が確認できた。52は慶長4（1599）年、95は慶長5（1600）年、1は寛永5（1628）年、58は寛永12（1635）年、10は寛永14（1637）年、87は寛永19（1642）年、77は寛文4（1664）年、62は延宝3（1675）年であった。13の基礎には「寛永十」まで読めたが、下の字を欠いていた。寛永10（1633）年以降のものと考えられる。

第4表 A地点地区別石塔類一覧表（実測点数）

種別	上段法面	上段平坦面	中段法面	中段平坦面	下段法面	下段平坦面	合計
一石宝篋印塔	1	9	3	6		4	23
一石宝五輪塔	3	9	1	1	1		15
組合せ宝篋印塔		9	4	7	5	6	31
組合せ五輪塔				1			1
無縫塔	2	13				1	14
光背形基標		2					2
石礎		2					2
銘板				1			1
練香立		3				1	4
合計	6	47	8	16	6	11	95

第5表 A地点年代別石塔類一覧表（紀年銘のあるもの）

年代 種別	1580 1589	1590 1599	1600 1609	1610 1619	1620 1629	1630 1639	1640 1649	1650 1659	1660 1669	1670 1679	合計	
一石宝篋印塔		2				1	3	1		1	1	9
一石五輪塔	1	2	5				1					9
組合せ宝篋印塔				2			1					3
無縫塔					1							1
合計	1	4	5	2	2	5	1	0	1	1	22	

第6表 A地点地区別年代一覧表（紀年銘のあるもの）

年代 種別	1580 1589	1590 1599	1600 1609	1610 1619	1620 1629	1630 1639	1640 1649	1650 1659	1660 1669	1670 1679	合計	
上段法面		2									2	
上段平坦面			1	5		2	2				10	
中段法面	1						1				1	3
中段平坦面					1				1		2	
下段法面				1			2				3	
下段平坦面			1					1			2	
合計	1	4	6	1	2	5	1	0	1	1	22	

52と87の「信士」とあり、1と77には「譽号」が見られる。13と62には「尼」の字が入る。これらは比較的大きいものである。58には「童子」の字が入り、子供の墓と考えられる。また、「飯真」と刻されている。A地点の一石宝篋印塔の中で最も小さい。

一石五輪塔（第7図）

15基を確認しており、このうち13基を図示した。紀年銘を確認できたものは9基あった。

44は天正13（1585）年とあり、A地点最古である。4は天正20（1592）年とあり、これに次ぐ。54は慶長2（1597）年で、ここまでが16世紀である。慶長年銘はさらにあり、50は慶長5（1600）年、51は慶長6（1601）年、45は慶長8（1603）年、14は慶長9（1604）年、さらに、48は慶長10（1605）年の可能性がある。A地点一石五輪塔のその他の紀年銘は、81の寛永10（1633）年である。

天正13年銘を持つ44は、高さは54よりも若干低いが、幅は若干広い水輪が扁平でどっしりとした印象がある。一石五輪塔の中では最大級である。同じく最大級の54は「信士」の戒名を持つ。4と50の戒名には女性を連想できる文字がある。45、48、51、81は「童子・童女」の銘があり、子供の墓と考えられる。A地点15基の中では比較的小さい。81には「飯真」と刻されている。

組合せ宝篋印塔（第8～9図）

組合せ宝篋印塔は、相輪9点、笠11点、基礎5点、台座2点確認されている。笠の点数により、11基以上が存在したものと考えられるが、塔身にあたる石材が一切確認できなかった。

相輪では上段平坦面の38、中段平坦面の東基壇の73は大型である。いずれも宝珠下部と九輪下部に請花を持ち、伏鉢と九輪の間に突帯をめぐらす。6、49、75、83、88、97と66、84の小型品を除いて、このような意匠である。

中段平坦面の東基壇に建てられていたと考えられる組合せ宝篋印塔の部材として、73の相輪、72の笠、71の基礎が挙げられる。73の相輪には九輪

に梵字キャラ、伏鉢に梵字カが刻されており、72笠には梵字ラ、71の基礎には梵字アが刻されている。また、75の相輪は西基壇にあったものと思われる。

組合せ宝篋印塔の基礎で紀年銘が確認されたものは3点であった。71は慶長19（1614）年、82は、寛永12（1635）年とある。86には、「慶長亥」とあり、可能性としては、慶長4（1599）年の己亥か慶長19（1611）年の辛亥が考えられる。86には、「譽号」がある。また、「信女」など女性の戒名が追刻がされている。82は、「譽号」と「大徳」号を有し、僧侶の墓と考えられる。

無縫塔（第10図）

無縫塔は塔身7点と基礎9点を確認した。このうち15点を図示した。紀年銘を確認できたのは、元和9（1623）年銘を有し、上段平坦面にある17のみであった。この無縫塔基礎は「譽号」を持つ。石塔類55基のうち9基と他の墓地に比べて無縫塔の占める割合が多い墓地と思われる。

光背形墓標

光背形墓標を2基確認した。いずれも上段平坦面にある。11は上部を欠いているが、A地点では11の上部は確認できなかった。41と42は接合して1体の光背形墓標となるが、ほぞの部分はなくなっていた。

線香立

線香立を4点確認した。上段平坦面の基壇1に18の組合せ宝篋印塔の基礎と19の線香立が乗っていた。状況から元位置に近いものと考えられる。

第3節 まとめ

墓域の形成と変遷

妙本寺上墓地のなかでも、A地点は古い墓塔が多い場所で、同墓地、また、昆布山谷地区における墓域の形成を考える上で重要な地点である。第5表と第6表は、紀年銘のあるもの22点について、墓塔の種別、あるいは造立地区ごとの年代別点数をまとめたものである。

A地点で最も古い石塔は、44の中段法面にある

天正13（1985）年銘を持つ一石五輪塔である。造墓数は1590年代、1600年代、1630年代に4基ある。いは5基と多いようである。年号で見ると、天正が2基、慶長が10基、元和が1基、寛永が7基、寛文が1基、延宝が1基であった。

紀年銘では、62の「延宝乙卯天」つまり延宝3（1675）年銘が最後である。A地点においては、18世紀後半に造墓される角塔の墓標や、地蔵などが全く見られないことから、墓地としては、この頃17世紀第4四半期以後使用されなくなった可能性が高いと考えられる。

A地点の地区ごとで見ると、上段平坦面と上段法面には、A地点で確認できる全ての種類の石造物がある。そして、古くは4の一石五輪塔の天正20（1592）年銘のものから、10の一石宝篋印塔の寛永14（1637）年銘まで造墓される。

中段平坦面は、本来、東基壇と西基壇のために造成された可能性がある。東基壇に乗っている71の組合せ宝篋印塔の基礎に慶長19（1614）年銘があり、この時に造成された可能性も考えられる。中段平坦面には、77の一石宝篋印塔の「寛文甲辰」（寛文4（1664）年）銘があり、A地点の中では、中段法面にある62の一石宝篋印塔の延宝3年銘に次いで比較的新しいものもある。

下段平坦面も、中段平坦面の場合と同様に、下段基壇のために造成された可能性がある。下段基壇の造営時期の直接の手がかりはないが、96の慶長3（1598）年銘を持つ一石宝篋印塔と87の寛永19（1642）年銘を持つ一石宝篋印塔があり、44年の差がある。

墓地と宗派

A地点の銘文を持つ墓石は浄土宗のものが多い。

墓石のうち、「豊号」を持つものが9基（1、17、50、54、62、77、82、86、95）あった。また、80の一石宝篋印塔と、87の一石宝篋印塔に梵字キリックが刻まれていた。

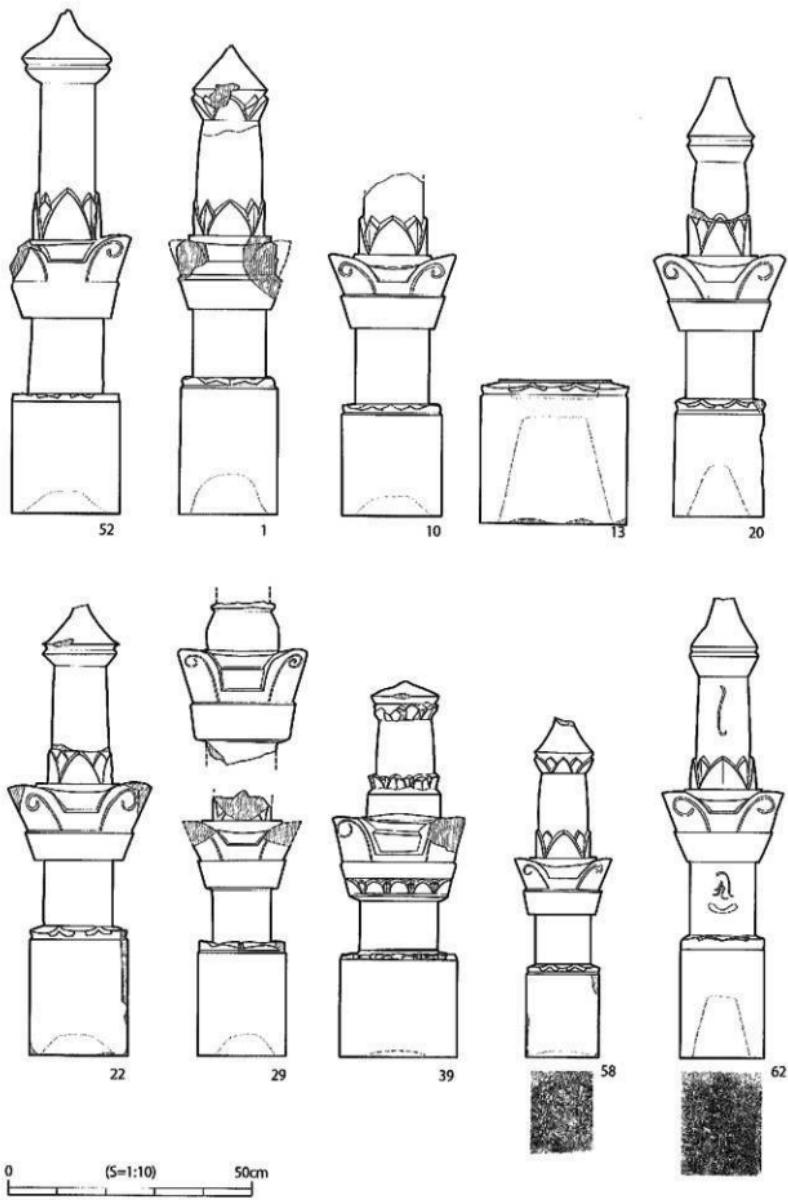
13の一石宝篋印塔に「歸興」、「禪記」と刻まれている。また、「童子」の墓に「眞誠」と刻まれ

た58の一石宝篋印塔と81の一石五輪塔が1基ずつある。このほかに、「尼」や、「信女」など女性の墓と思われるものが5基確認された。このうち、86の組合せ宝篋印塔基礎には2人分以上の追刻がなされていた。

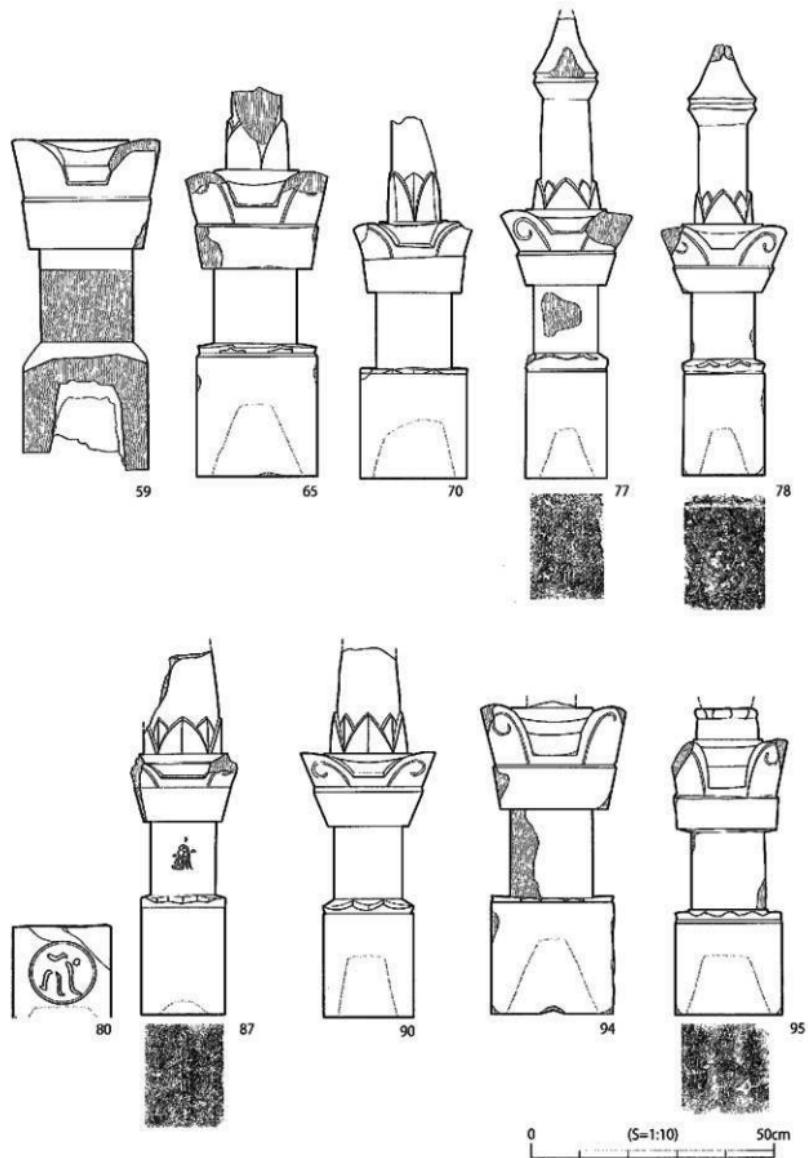
また、童子の墓は3基、童女の墓は2基ある。

妙本寺上墓地A地点では、石見銀山の最盛期に位置づけられる戦国時代末から江戸時代前期にかけて、特に、紀年銘で見る限り、慶長年間（1596～1614）と寛永年間（1624～1643）をピークに一石宝篋印塔、一石五輪塔、無縫塔など比較的小さい石塔を中心に造墓している。その中にあって、中段平坦面の2基の基壇や下段基壇を造成し、比較的大型の組合せ宝篋印塔を建てており、昆布山谷地区や寺院関係の有力者の墓であることが伺われる。

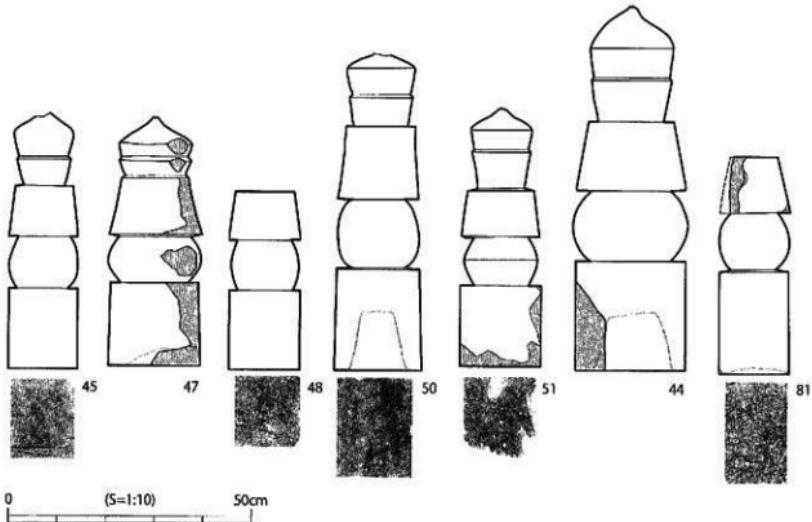
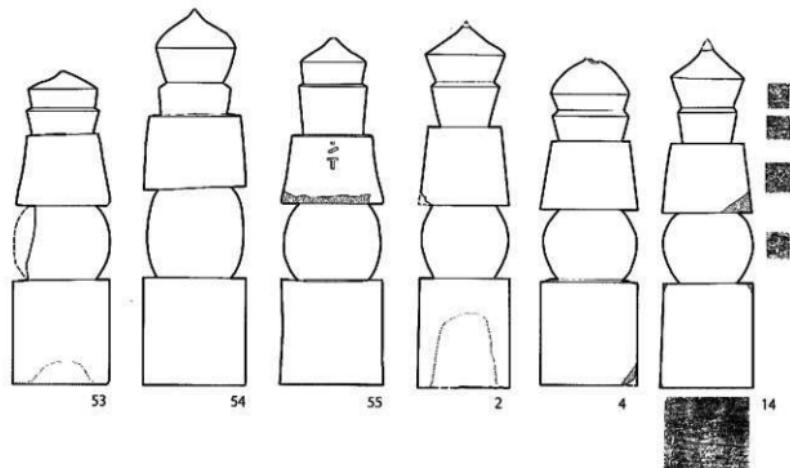
A地点では18世紀以降盛んに造立される角塔が一切見られず、紀年銘で見ると、62の延宝3（1675）年銘の一石宝篋印塔を最後に造墓を終わっている。妙本寺上墓地の中で、最古の墓域と考えられる。



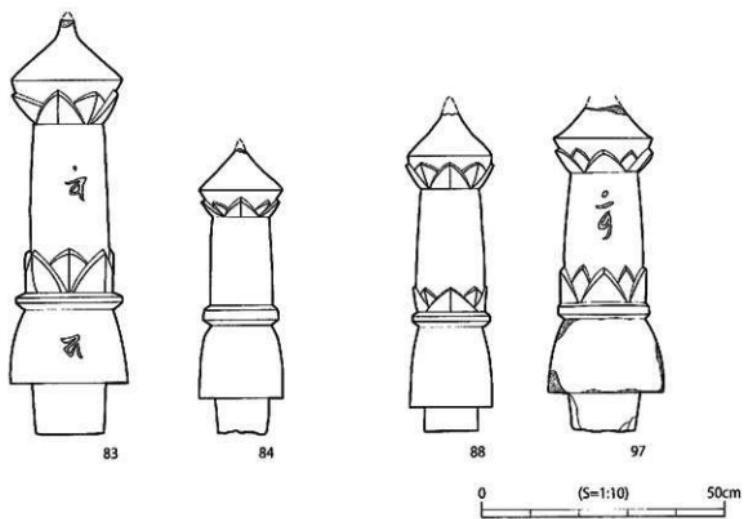
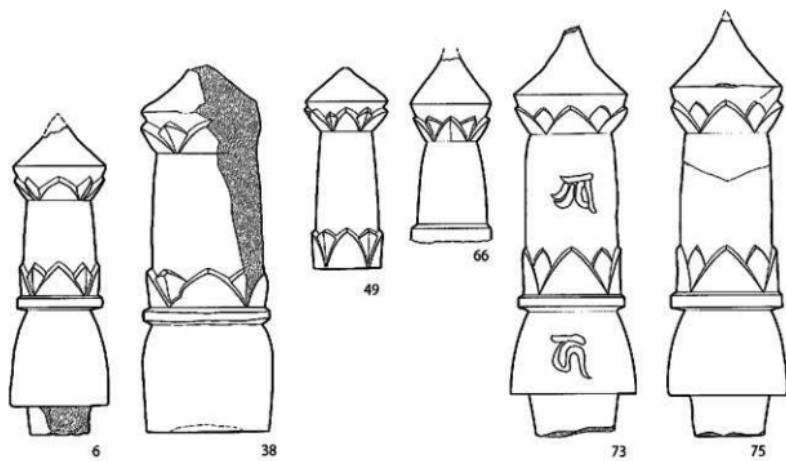
第5図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図(1)



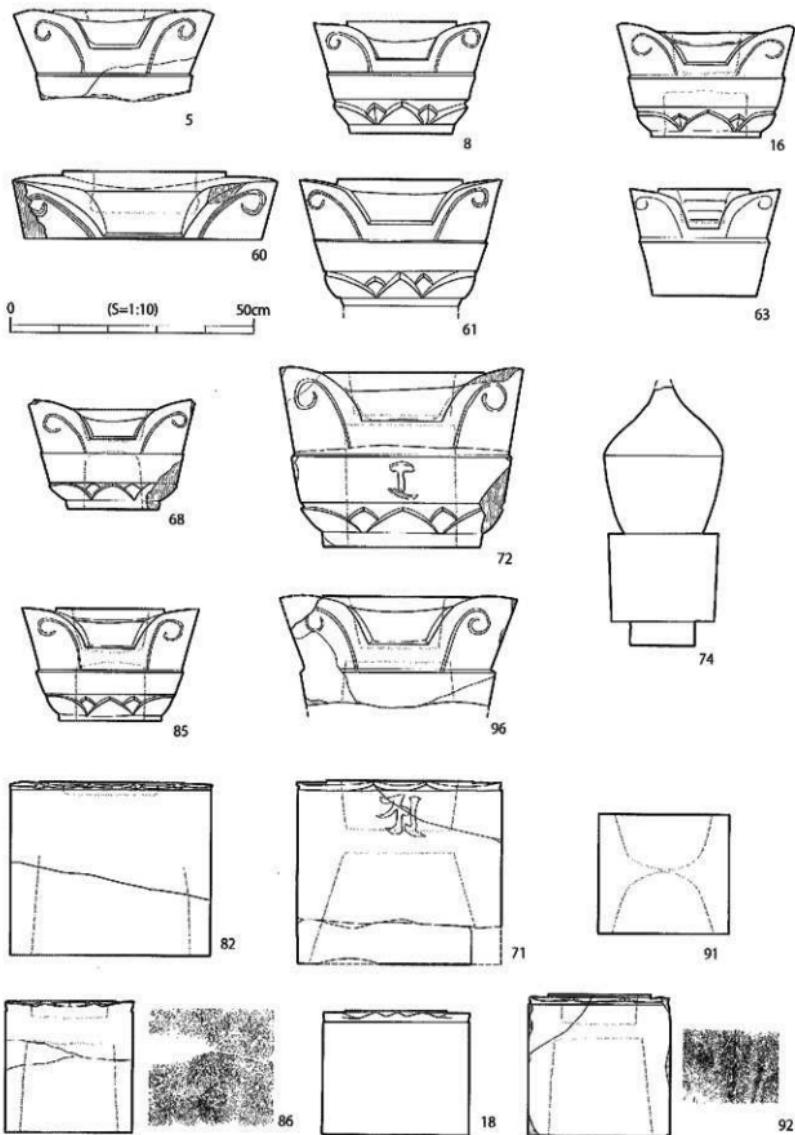
第6図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図（2）



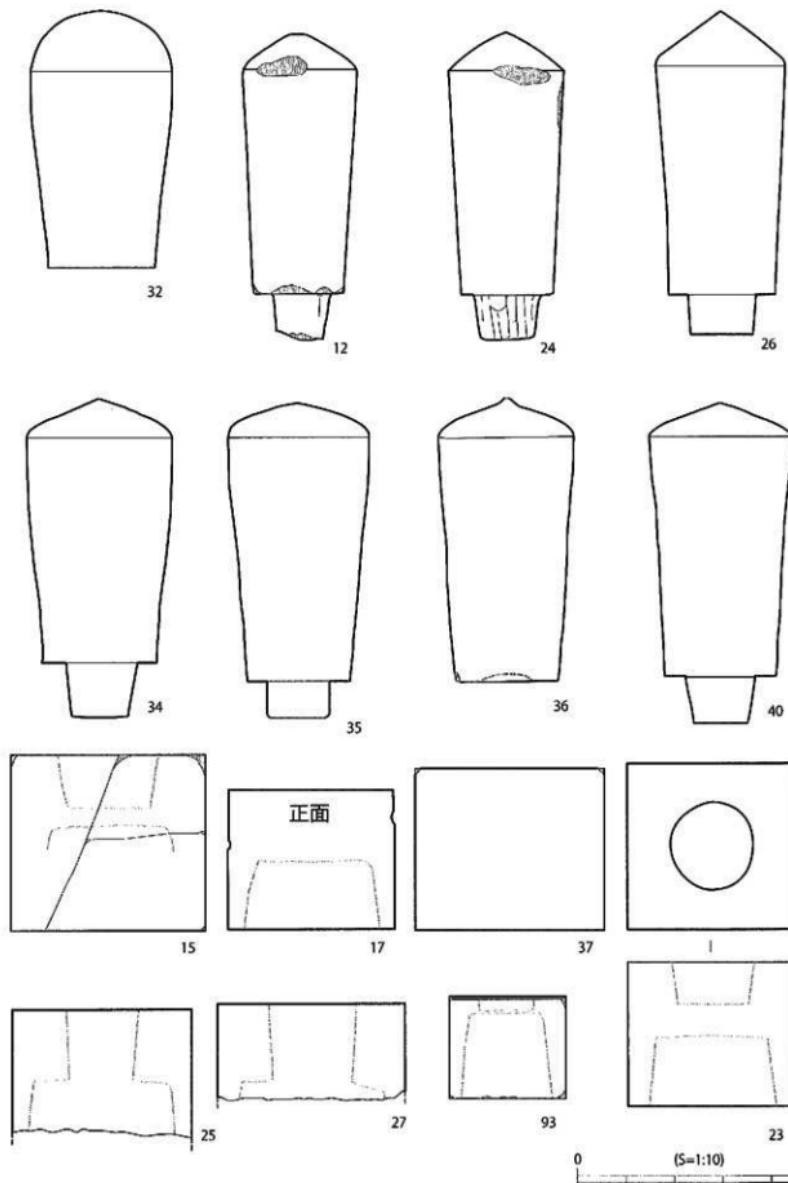
第7図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図(3)



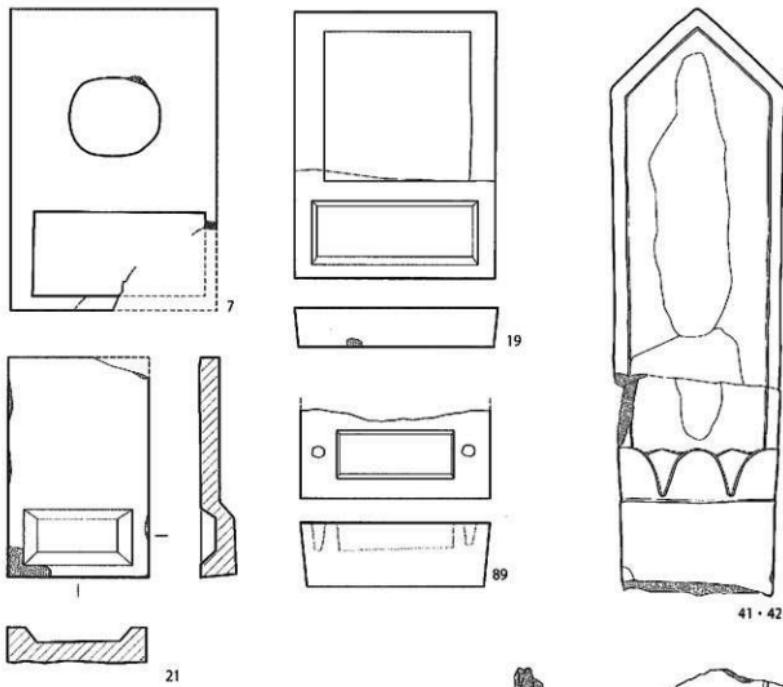
第8図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図(4)



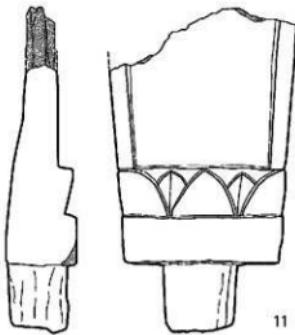
第9図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図(5)



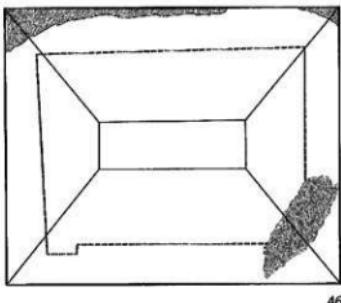
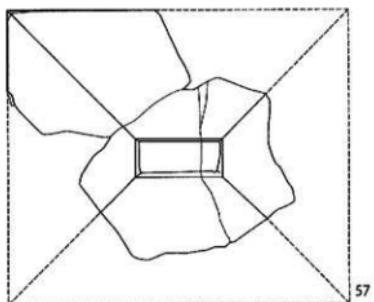
第10図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図（6）



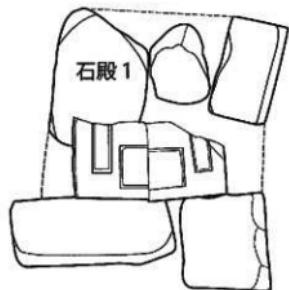
0 (S=1:10) 50cm



第11図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図（7）

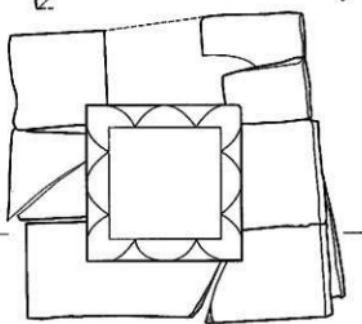
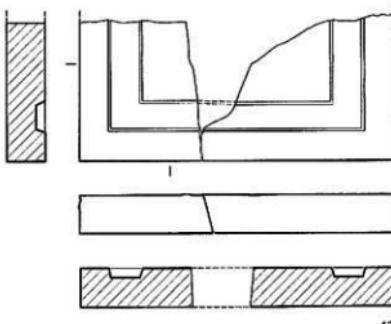


0 (S=1:10) 50cm



上段平坦面石殿 1 残存状況実測図 (S=1:20)

0 (S=1:20) 1m



中段平坦面東基壇基礎台座実測図 (S=1:20)

第12図 妙本寺上墓地A地点石造物実測図 (8)

凡例

- ・第7表には、石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地A地点の石造物を掲載した。
- ・各石造物の規模は、基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は、残存している規模を()内に記載した。
- ・複数部材からなる石造物の高さは、上の部材の高さ+下の部材の高さ、最大幅は、上の部材の最大幅／下の部材の最大幅、と記載した。
- ・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面)… 右面)… と記載している。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して数字が不明な場合は、〔(上欠)〕、〔(下欠)〕と示した。また、推定できる文字は□の後に(か)と表示した。
- ・戒名及び名字は基本的に伏字で○○とした。
- ・実測図を掲載していない石造物についても、一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
- ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

8	6	9	9	8	8	9	7	6	6	持回番号
88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	報告番号
(相思)	組合せま縫印塔 一石三箇印塔	(相思) 組合せま縫印塔 (義母)	(相思) 組合せま縫印塔	(相思) 組合せま縫印塔	(相思) 組合せま縫印塔 (義母)	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔 (承認)	一石五輪塔 (相思)	種別
60	(75)	27	23	51	74.5	35	(44)	18	88	高さ
17	(23)	26	36	17	24	41	14.5	19.5	26	最大幅
	西月十六日 白 正徳 〔翁文〕 〔翁文〕 〔翁文〕 〔翁文〕 〔翁文〕	慶永口灰 〔上文〕 〔下文〕 〔翁文〕 〔翁文〕	慶永口灰 〔上文〕 〔下文〕 〔翁文〕 〔翁文〕	相思正面に梵字パン 伏跡正面に梵字力	相思正面に梵字パン 伏跡正面に梵字力	成実 眞永十二年 九月廿四日 敬白	寛永 大徳 ○○年 庚午 九月廿六日 敬白	月輪内に梵字キリーグ		銘文
	坦局 はそぞれ10.0cm 下段平	下段平坦面	下段法面	下段法面	中段平坦面	中段平坦面	中段平坦面	中段平坦面		備考
	1642	1599?1611?			1635	1633				西歴

12	8	9	6	6	10	9	9	6	11	持回番号
99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	報告番号
鏡板	東基壇・台座	組合せま縫印塔 (相思)	組合せま縫印塔 (相思)	一石三箇印塔	無縫塔	組合せま縫印塔 (相思)	組合せま縫印塔 (相思)	一石三箇印塔	組立	種別
(11)	14	(58.5)	(22.5)	(63)	(60)	21	29	24.5	(75)	高さ
(17)	72	24	(49)	(25)	29	24	29.5	27	39	最大幅
□□□○○ ○○○○○ ○○○○○ ○○○○○ ○○○○○ ○○○○○ ○○○○○ ○○○○○	相思正面に梵字パン	梵字ア ○慶長三年 十一月廿二日								銘文
中段平坦面 はそぞれ10.0cm 下段平	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	下段平坦面	備考
			1598							西歴

9	9	5	9	9	6	5	12		7	7	7	持回番号
64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	報告番号
(8)	(8)	一石宝鏡印塔	(8)	組合せ宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	石鏡	一石寶印塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	種別
(11)	21.7	94	(25.5)	(14)	(66.5)	69.5	11		71	77	64	高さ
(38)	30.5	25	41	54	30	20	(70)		21	21.5	20	最大幅
		為〇〇〇尼 十ニ十三日 塔身大 基盤正規 梵字 キリック 梵字口 梵字 中段法面 中段法面		組合せ宝鏡印塔	東永士 ○○重子 五月十一日	百 石鏡一式 高行き60 印 上	五 火箱に梵字ラン 三月十七日	梵字ア ○世○信士 磨長二年	梵字ア ○世○信士 磨長二年	梵字ア ○世○信士 磨長二年	梵字ア ○世○信士 磨長二年	梵文
61	60	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	備考
		1675			1635				1597			西脣

6		8	9	8	9	9	6		9	8	6	持回番号
77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65
一石宝鏡印塔	(8)	組合せ宝鏡印塔	(8)	組合せ宝鏡印塔	(8)	組合せ宝鏡印塔	一石五輪塔	(8)	組合せ宝鏡印塔	一石五輪塔	(8)	報告番号
93.5	16	76.5	48	89	37	37.5	(74)	(17)	22.5	(22)	(37)	高さ
27	21	25	25	26	50	42	(24.5)	(12)	34	19	16	最大幅
為〇〇尼 八月全西日士 東文甲底				正題 正面に梵字ア 伏跡正面に梵字ア	梵字ア (上)「一」表位 磨光於九年 二月廿二日							梵文
1664		坦面	坦面	13 厚 5 cm 中段平坦面	東基座の上にあり。 A地點で はそ厚5cm はそ厚8cm 西基座の主 橋 中段平坦面	中段平坦面	平坦面	中段平坦面	中段平坦面	中段平坦面	中段平坦面	石材の貿易社、中段平坦
		中段平坦面					1614					備考
												西脣

10	5	8	10	10	10	10		10	5	5	10	停回番号
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	報告番号
(塔身) 無縫塔	(組合せ)無縫塔	(組合せ)無縫塔	(塔身) 無縫塔	種別								
655	77	75	33	58	64.5	65		52.5	(32)		(54)	高さ
30	27	27	39	28	29	30		29	26.5		(20)	最大幅
												銘文
												備考
												西脇
上段平坦面	傾斜	傾斜	上段平坦面	停回番号								
上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	上段平坦面	報告番号	

5	7	7	8	7	7	11	7	7	11	11	11	停回番号	
52	51	50	49	48	47	45	45	44	43	42	41	報告番号	
(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	(塔身) 一石五輪塔	種別	
130	56	65	(41)	(35)	51	21	55	75	8	100		高さ	
24.5	17	18	17	14	19.5	69	14	22.5	65	36		最大幅	
												銘文	
												備考	
上段法面	○ 唐長六年 （大和）信士 二月四日 庚辰四年 三月廿六日	○ 唐長六年 庚辰四年 五月廿十日	梵字口 唐長六年 庚辰四年 五月廿日	○ 唐長六年 庚辰四年 五月廿日	白敬		梵字ア 口 ○ 唐長八年 庚辰四年 五月廿五日 敬白	唐長八年 庚辰四年 五月廿五日 敬白	梵字ア 口 ○ 唐長八年 庚辰四年 五月廿五日 敬白	天正十三年 庚辰四年 五月廿五日 敬白	1		西脇
												西脇	
												西脇	
												西脇	
												西脇	

第7表 石造物一覧表
妙本寺上臺地A地点の石造物

登録番号 (件)	11	5	9	11	8	9	7	7	5	種別	
										報告番号	登録番号
10	11	5	9	8	7	6	4	3	2	1	1
12	11	10	9	8	7	6	4	3	2	1	1
無縫塔 (身)	光背形石塔 (身)	一石半圓印塔 (身)	組合せ半圓印塔 (身)	鎌倉立 (身)	組合せ半圓印塔 (身)	組合せ半圓印塔 (身)	一石五輪塔 (身)	一石五輪塔 (身)	一石五輪塔 (身)	一石五輪塔 (身)	一石五輪塔 (身)
62.5	(64)	(70)	17.5	36		63	(18)	66.5	54	74	86
24	(32)	20	20	22	43	20.5	42	20	20	18.5	20
高さ 最大幅	寛永五年 九月九日	正徳 火候に梵字ヲ、水船ニ梵字ハ 天正廿年 六月廿四日 白	空風火水地元字ア 為〇〇〇〇〇 主	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面	上段平坦面 上段平坦面
絶文	正徳 九月九日	天正廿年 六月廿四日 白	寛永五年 九月九日	正徳 火候に梵字ヲ、水船ニ梵字ハ 天正廿年 六月廿四日 白	上段平坦面 上段平坦面						
備考											
西暦	1592									1628	西暦

登録番号 (件)	10	10	10	10	5	11	5	11	9	10	種別	
											報告番号	登録番号
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
無縫塔 (身)	無縫塔 (身)	無縫塔 (身)	無縫塔 (身)	一石全圓印塔 (身)	鎌倉立 (身)	組合せ半圓印塔 (身)	組合せ半圓印塔 (身)	組合せ半圓印塔 (身)	無縫塔 (身)	一石五輪塔 (身)	一石五輪塔 (身)	一石五輪塔 (身)
66	(20)	66	29.5	92.5	7.5	90	8	25.5	28	22	36.5	71.5
27	37	24	34	29	29	27	41	30	34	36	40	19
高さ 最大幅	寛永九年 正月十四日 癸酉	元和九年 正月十四日 癸酉	寛永九年 正月十四日 癸酉	寛永九年 正月十四日 癸酉	上段平坦面 上段平坦面							
絶文	寛永九年 正月十四日 癸酉	寛永九年 正月十四日 癸酉	寛永九年 正月十四日 癸酉	寛永九年 正月十四日 癸酉								
備考												
西暦	1604									1633	西暦	

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	尾布山谷地区 妙本寺上墓地A地点の石造物調査		
卷次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	17		
編執筆者	大庭俊次		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 〒694-0064 島根県大田市人出町大田ロ1111番地	TEL 0852-22-5642 TEL 0854-82-1600	
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	2017年3月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
名称	所在地	主な時代	石造物
妙本寺上墓地 A地点	大田市大森町	安土桃山時代 ～ 江戸時代前期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、組合せ五輪塔、無縫塔、光背形墓標、石殿、線香立

石見銀山遺跡石造物調査報告書17

—昆布山谷地区 妙本寺上墓地A地点の石造物調査—

平成29（2017）年3月

編集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

URL http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印刷 有限会社 松陽印刷所
